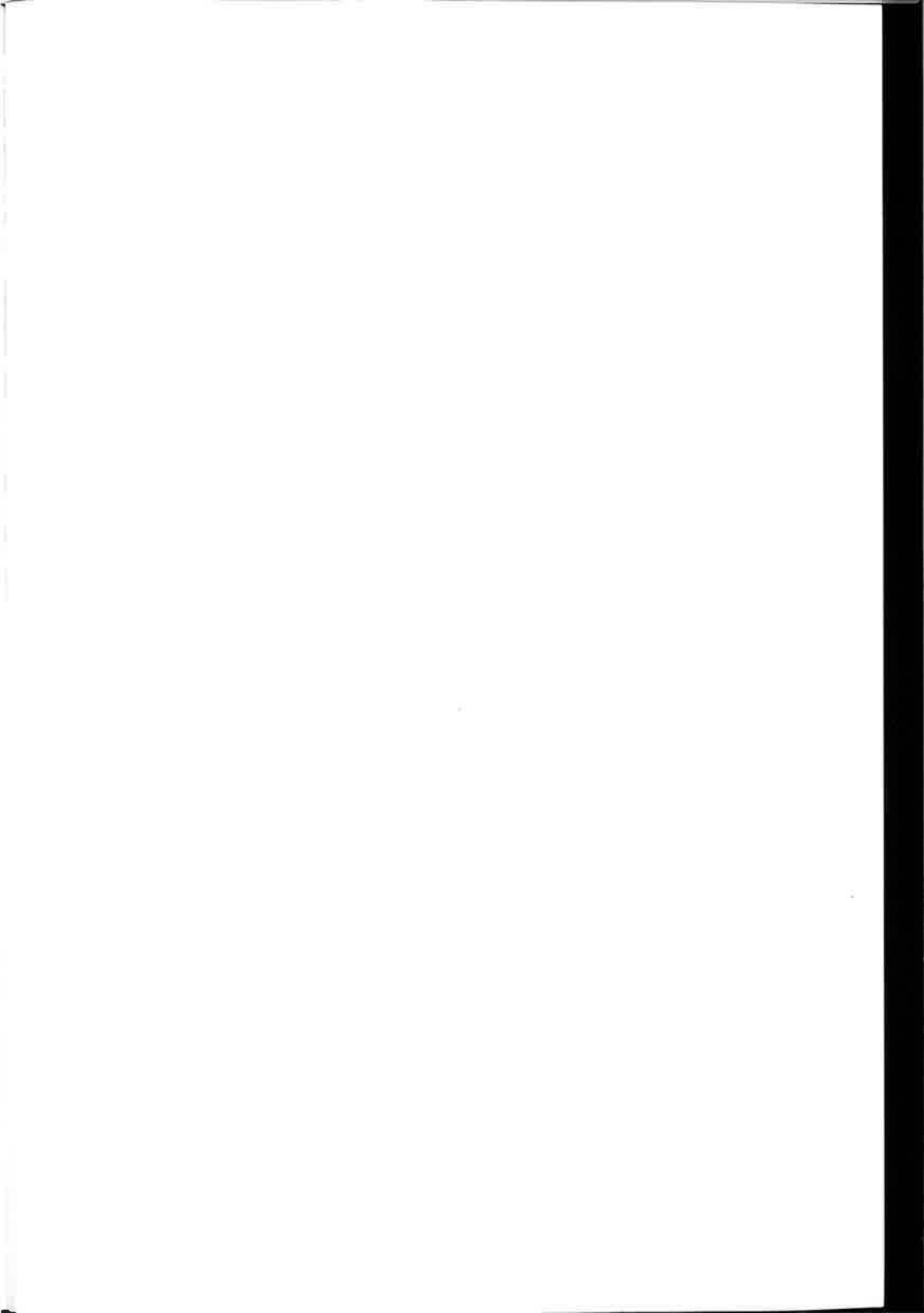


平成二十八年四月
山口真宗教学第二十七号

起觀生信の研究

森
慶
樹



起観生信の研究

玖珂西組 明覚寺 森 慶 樹

序

起観生信の論題を検討するについて、先ず問題となるのは、「起観」の「観」と「生信」の「信」の分齊と関係である。起観生信の「信」は、『浄土論』に「云何生信心」※とあるから、初起とするのが文に親しい（後に述べる先哲の説は、生長の義を除いて皆初起としている）。

また「起観」「生信」と次第するから、「観」は「信」を生ずると考えられる。然るに、信前の自力の観が信心を生ずると云う義は、明らかに不当であり、『百論題』※を見ても、先哲はこれを真つ先に否定されている。では、この「起観」と「生信」の関係を如何に考えるべきであろうか。

この論文では、先ずこの問題を考察し、後にこれを踏まえて、『起観生信章』の問答の意義を明らかにしていく。

※ 本論文では『論』『論註』の引用文は『真宗聖教全書第一巻』によった。引用文のカタカナ表記はひらがなに、漢字の旧字体は随宜新字体に変更。漢文は原文の返り点に従って筆者が書き下した。引用文の傍点と傍線は筆者による。『真宗叢書百論題集』は『百論題』と省略して表記。

一、先哲の義とその批判

「觀」と「信」の分齊と關係に就いては、古来より先哲の中でも諸義が立てられて来た。今、義山和上の釈を參考にして先哲の義を概觀すると、以下の如く四義となる。その第四義は義山和上の所立である。先ず、これらの義を窺つてみよう。

1 生長の義

〔立義〕「起觀は信後起・行の觀察にして、生信は初發の信心を増・長するを云ふ、乃ち生とは生長の義なり」（義山和上『百論題下』起觀生信 六七頁）

「此二（起觀と生信）を顯すものは法・味を味ひ心に常に相續すること」（善讓和上『百論題下』起觀生信 六三頁 カッコ内筆者）

この義は、起觀・生信ともに相續とする。而して、その意は起觀増信である。

然るに、信心相續について、非意業の信心は、初後一貫にして不變なのであるから、この義の意を推し量るに、相續の意業憶念（この義では意業も信心とする、信行混流の信）に於て、法の味わいが深くなることを生長（増長）と云つていると考えられる。

〔批判〕「若したゞ生長の義のみを以て弁ぜば、此『一論』の大意唯信後の起行を以て信を増長す

ることを明すにありと云ふべきや、高祖の「一心華文」と讃じ「論主宣布广大無碍一心」と

嘆じ給ふは皆主として初起を云ふものにして、たゞ相續増長を明かすの謂には非ざるべきなり」(義山和上『同』六八頁)

2 發生の義

〔立義〕「觀・行・を・修・して・信・心・を・發・生・するの義なり、此論所明の觀、意業作法ならざるはなし…願力を觀する行法故、弘願觀にして以て信を生ずべし、弘願觀なりと雖も觀・即・信・とは云ふべからず…意業の觀に縁つて非意業の信を生ず、是故に此觀は信後の觀と位を同ず」(義山和上『同』六八頁)

「機に就いて暫く前後を論ずれば、則ち願・力・に・觀・達・したる後・位・は・觀・如・実・にして生信の觀なり、縱令法相は弘願なりと雖も、未觀達の前位に約すれば則ち方便とするに妨なし」(善讓和上『同』六二頁)

この義は、起觀・生信ともに初起とする。

但し、起觀は意業の行にして、非意業の信心とは別であるが、初起の非意業の信心と同時にある。信前の不如実觀が、信開發の時に至つて如実の觀と解され、これが信を生ずという義である。即ち觀行生信初起同時の義である。

〔批判〕「信に非ざる觀知の心相は何事を云何が思ひ浮ぶることなるべきやらん、又觀は必ず信前の行にして、生信の方便とは云はんも可なりとせば、余の四念皆信前なるべく、讚嘆門の稱

生所生)を以て、初起の信の成立構造(能信所信)を顕わすと考えるべきであろう(花田和上にも、相続に於て初起の聞名を顕す義筋が窺える①)。

今謂く。第四義の相続寄顕の義を修正して、義を立てる。

起観は、見易き相続の觀察行の所に寄せて、初起信心の所信を顕す。この所観所信の法が能く能信の心を生ずるのを、起観生信と云う。言い換えれば、所観生信である。

弘願の信心は、機功に由らざる故に、観と云いても能観に功を見ない。全く所観の本願力が、信を生ぜしむるからである。

「起観生信と雖も能観の功を認むるに非ず、全く所観の不可思議力を建立するにあり…所観の不可思議力能く生信せしむ、故に全く所観生信と知るべし」(善讓和上『同』六二〜六三頁)

初起の信心に於て、能観の行業は無いが、能信所信の関係は初後同様である故に、相続を以て初起を寄顕したのである。この義より考えれば、「云何観」とは能観ではなく所観所信を問うものとなる。

○まとめ

- | | | | |
|---|------|-------------|-----------------------|
| 1 | 生長の義 | ∴ 起観生信、共に相続 | ∴ 起観∥觀察門 ∴ 起観増信の義 |
| 2 | 発生の義 | ∴ 起観生信、共に初起 | ∴ 起観∥觀察門 ∴ 観行生信初起同時の義 |

- 3 観即信の義 …… 起観生信、共に初起 …… 起観〓信心 …… 起信生信の義
- 4 相続寄頭の義…起観生信、相続と初起…起観〓觀察門…
 {寄頭具徳の義(義山和上)
 寄頭所信、所観生信の義(今義)}

二、觀察門の内容

実に『浄土論』の觀察門の示すところは、此土願生行者に約したときは、能観の方法や能観の行功ではなく、所観所信にあるのである。何となれば、

1 『論』『論註』の觀察門には、『観経四帖疏』の要門観の如き能観作法は談ぜられない。

2 『論』の觀察門は所観の三種莊嚴を列挙し、後にこれを二十九種に開示する。

この所観觀察体相の三嚴は、不虛作住持功德におさまる。三嚴を観ずるは、不虛作の願力を観ずるのである。是れは即ち、「眞実功德大宝海」(二門偈)の名号名義を信ずるの意である^①。

3 『論』の偈頌に「故我願生彼阿弥陀仏国」とあるは、従前の浄土觀察の内容「観彼世界相…」を以て斯く云うもので、能観の行功を理由となすものではない。この偈頌の三嚴は、『論註』上巻で、觀察門に配釈される。

4 『論註』(起観生信章)の觀察門には觀察により往生を得ることを述べてあるが、文に「如実の功德は、決定して彼の土に生を得るなり。」とある如く、往生の功は所観の如実功德にあると云

う釈相である。

5 『論註』の觀察体相の三嚴二十九種の釈を窺うに、上卷は仏願生起本末であり、下卷は仏土不可思議を以て釈されている。これは、善男子善女子の所信の名義であり、また名号功德である。

故に觀察門は、此土にあつては、能觀の行を詳しくするものではなく、所觀所信を明かすものであることが知られる。觀察体相も、善男子善女人の所觀所信の境を広く明したものに他ならない^②。

然るに『論』の觀察門には「智・恵・觀察・正・念」の言があつて、一分能觀の性格も示されている。これは如何に考えるべきだろうか。蓋しこれは眞実に相應（他力の法に相應）する意を示さんが為と考えられる^③。然し、相應の義辺は、後に述べる様に讚嘆門の受け持ちであり、觀察門の正しく示さんとするものは、やはり今述べた様に所觀の辺にあるのである^④。

一方で、従来の義で具徳とされる、高度な觀察（毘婆舍那）は彼土菩薩の行である^⑤。

三、徴起と答釈の齟齬

○従来義の問題点

次に『論』の『起觀生信章』の、徴起の問と答釈との關係を、考えて見よう。

先哲の義は、五念門を以て一心の具徳となすが故に、「云何觀云何生信心」の徴起（信相）に対して、五念門行の具徳を以て答えるとなす。而してこれを「修五念門行成就…見彼阿彌陀仏」と起行で答え

るのは、「但相統の相に就いて、其既に獲たることを顯すのみ」(是山惠覺和上『往生論註講義』一三四頁)と云われる。

然るに、この解釈では、問と答の間に、以下の如く二の齟齬があると考えられる。

A 何故に、初起を問うて、起行を以て答えるのか

「云何が信心を生ずる」と、信心の發起を問う徵起に対して、何故に起行を以て答えるのか。起行は初起信心の相統であり、起行を待つて信心が開発するのではない。他力の信心は、願力を聞くによりて發起するものではないのか。

B 何故に、信相を問うに、その具徳を以てするのか

信心の發起を問う徵起に対して、何故にその具徳を答えるのか。信心を獲た者が、往生成仏の因徳を具するであるから、先ずは云何に信心を發起するか、その信相を答えねばなるまい。

この徵起と答釈の齟齬を如何に消釈すれば良いであろうか。

○答釈の位置の再検討

私に考えるに、徵起と答釈の關係が解し難い原因の一つは、答釈を『起觀生信章』冒頭の「修五念門行成就：見彼阿弥陀仏」の文となす時、これが簡略に過ぎるが故であると思われる。「云何觀云何

生信心」の問いの答えは、本当にこの短い文のみなのであるうか。

改めて考えてみると、「修五念門行成就…」の文の次下に、「何等五念門…」と続くが故に、答えの範囲をこの文のみに限るべきではない。むしろ『起觀生信章』全体を以て正答とすべきではないかと思われる。

ここで、宏遠和上の『浄土論講苑』を見ると、和上は次下の「出五念門」以下を含んで答えとし、「示五念力」の文を略答と見ておられる様である。

「若善男子善女人修五念門行成就…見彼阿弥陀仏

前の徵問を略答す…答中先五念力を示し。後五念門を出す。」（宏遠和上『浄土論講苑』下 八
〜九丁）

即ち『章』の最初の「修五念門行成就…」の文は、先ず『五念門』の名を出して略答するのみであり、次下の「何等五念門…」以下で説明される内容が、その正答と見なすべきである^⑥。

では、その五念門の内容とは如何なるものであり、「云何觀云何生信心」の問に如何に答えているのであろうか。

四、五念門の内容

以前の私の『五念門の研究』（山口真宗教学第二十一号）の論文で、述べたことをまとめると、五念門は、衆生の機上に展開する名号法（行信）の徳相である。而してこれは、浄土菩薩の回向によって成ずるものであり、摂末帰本すれば、如来の本願力回向の働きに帰する^⑤。

・礼拝 …… 機の趣入（二門偈では善巧方便の権用の義を出す）

・讃嘆 …… 名義相応を示す

・作願 …… 一心専念願生の信心

・觀察 …… 三嚴、先に述べた如く、所觀所信の名号法（行）

・回向 …… 浄土菩薩の回向、本願力回向

これを以て考察するに、「云何觀」は所信所觀として、五念門の觀察門に対応し、「云何生信心」は願生心たる作願門に対応する。起觀生信の問いに直ちに対応すると云う意味で、五念門の中心は作願・觀察の二門であり、蓋しこの故に、『論註』に於てこの二門にのみ別して彼土の行が示されるのである^⑦（回向門は最初から彼土菩薩の行のみである^⑧）。

而して、他の三門は、これらを助顯するために開かれたものと考ええる。即ち、「云何觀」「云何生信心」と五念門とを、開合の關係と解するのである。

五、從來義との比較

○從來義の觀察門釈

上來論じて来た如く、觀察門は此土行者にとつて、所信名号法を示すと為すのが、起觀生信の問答を解釈する時の要点となる。

しかし、此土の觀察行を、聞其名号と同義と窺うこと（即ち所信に着眼すること）は、從來の先哲の釈にも見られるところである^{①⑧}。では何故に、起觀生信を論ずる時に、觀察門が善男子善女人の一心の具徳と釈されるのであろうか。

私にこの理由を考えるに、從來義は、行者の觀察門を易行の意業憶念（相発）と見るとともに、大菩薩の行業たる毘婆舍那の難行と見て、これを法藏菩薩所修の行徳となし、行者の信心の具徳（因徳）する（この故に「善男子善女人」は又「菩薩」と呼ばれることになる）。即ち、一の行者の上に難易の二行を談ずるのであるが、これに加えて、易行の聞名の義で觀察門を釈す時に、その所觀所信の名号功徳を、毘婆舍那の徳と同一視するのである^⑨。

斯くして觀察門は、相発・因徳ともに、毘婆舍那の徳が注視せられ、結果『論』を全体的を窺う時、偏に具徳と釈される事になってしまふと考えられる。

○今義の理解

一方で今義は、『論』に於ける「善男子善女人」と、「菩薩」を二機とみて彼此の觀察行を考える立

場である^⑤。而して難行たる止観は、彼土菩薩の行業であつて、これを直ちに法蔵所修とはしない（法蔵所修の義は、彼土菩薩の行業を一旦本願力回向に歸して後に考え得ることである）。

この上で先ず願生と觀察を、此土の行者の行信となし、ここに機相と因徳を見る。一方で止觀の難行は行者の具徳ではなく、彼土菩薩の自利行あり、利他回向の本となるものと位置づけられる（即ち前四果門より第五の園林遊戲地門に至る^⑤）。

即ち、此土の易行たる觀察と、彼土の難行たる觀察を、二機別義と見るのである。此土の行者の觀察行は、本願力を觀て（聞いて）撰取の用を被る所救の立場なのに対し、彼土の菩薩の觀察行は、本願力を觀て、無功用自在を得て、還相利他の化用を顯す。即ち此土の行者を弘願に誘引せしむる能救の立場である。

○まとめ

從來義は、『論』の機類を一機とみて、その上に相発（機相）と具徳を見ようとする。『起観生信章』冒頭の「善男子善女人」が、一心の具徳（法藏所修の止観回向の難行）を以て、『善巧摂化章』以下、「菩薩」と名を変えると云う（是山和上『講義』参照）。

一方で今義は、『論』の機類を善男子善女人と淨土菩薩の二機とみて、易行（此土の作願觀察）と難行（彼土の止觀回向）を振り分けるのである。

・從來義（一機義）……	善男子善女人（菩薩）	具德（法藏所修）……	因德
		相發	機相

・今義（二機義）……

善男子善女人（此土）……	因德機相
菩薩（彼土）……	彼土行業

六、起觀生信の問答の意義

○起觀生信の問と作願觀察二門

起觀生信の問答の意義を、以上に述べた五念門との關係を以て考えて見よう。先ず「云何觀云何生信心」の問とは、「云何觀」は所信を問ひ、「云何生信心」は能信を問うが故に、要するに信心を能信と所信の二面から問うている問である。

次にその答えとしての五念門とは、先には機上に展開する名号法即ち行信の徳相と云つたが、この行信とは、能信（信）所信（行）の事に他ならない。作願門は、能信を一心専念相続の願生心と答え、觀察門は、所觀所信を答えるのである。所信とは、『論註』の觀察体相の釈を窺うに、仏願生起本末、如來不可思議力である。

即ち、起觀生信の問答とは、信心を能信所信の二面から問うて、これにそのまま能信（作願）所信（觀察）を以て答えているのである。そして礼拝・讚嘆・回向の三門は、この能信所信を助顯する為に開示されたと窺うのである。

ではこの三門は、如何に信心を助顯するのであろうか。

○讃嘆門の意義

先ず礼拝・讃嘆・回向の三門では、讃嘆門が重要である。これは名義相応を論じて、能信所信相応の信心の義相を示すからである。

- ・能信 …… 一心専念（作願門）
- ・所信 …… 本願名号（觀察門）
- ・相応 …… 名義相応（讃嘆門）

これは即ち、如実と不如実を対照し、如実の義を明示するのである。能信所信の相応とは、所信名義を誤り無く、そのまま信ぜよの謂いである。故に周知の如く『論註』では、所信の二知と能信の純朴の信相（淳心）などを、三不信を以て反顯されている。

○起觀生信の問答の意義

以上の所論を踏まえて、平たくいえば云えば、起觀生信の問答とは、『何をどのように信じずればよいのか』と云う問いに対して、『本願を一心に信じて名号名義と相応せよ』と答えていることになるのである。

これに礼拝門と回向門を加えれば、『この信心は菩薩の善巧と他力回向により發起する』となる。以下続いて、礼拝門と回向門を説明しよう。

○回向門の意義

回向門とは、此土行者の回向行ではなく、彼土菩薩の回向行であり、此土行者の前四門は、還相菩薩の教導によつて成ずるのである^⑤。これは撰末歸本すれば如来回向の働きである。

○礼拝門の意義

最後に礼拝門は、五念門の先頭にあることと、「彼の国に生ぜむ意を為させむが故なり」の宗祖の訓より窺うに、これは衆生の趣入を表す。この「意」とは、『論註』の釈の如く「願生の意」であるが故に、願生せしめん為の礼拝門である。

更に、宗祖『二門偈』礼拝門の「諸の群生を善巧方便して安樂国に生ぜむ意をなさしめたまふが故なり」（『真宗聖教全書』二卷 四八一頁）の釈より窺うに、礼拝門とは、如来若しくは浄土菩薩の、衆生に願生心を起こさしめる為の善巧の働きである^⑥。

即ち、礼拝回向の二門は、如来、若しくは浄土菩薩の善巧、即ち他力の働きを表し、讃嘆・作願・觀察で示される信心が、他力発起の信心であると助顯するのである。

七、齟齬の消釈

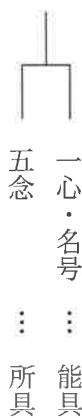
以上に述べた義を以て、先の徴起と答釈の齟齬を消釈してみよう。先ずB義から消釈する。

B 何故に、能信を問うに、その具徳を以てするのか

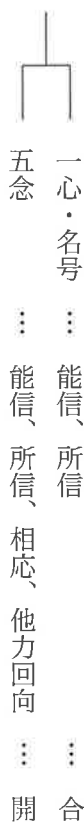
五念門は、具徳ではなく行信の当相である。所信（云何観）と能信（云何信）を問い、これを五門に開いて、説明するものである。

換言すれば、五念門は一心や名号の具徳を示している（従来義）と云うより、一心（能信）や名号（所信）が、広く五念門を以て説明されているのである。

・従来義



・今義



即ち、信相を問うて、その信相を五念門を以て答えているので、そこに齟齬はない。

次にA義に就いてであるが、実はこれは本論冒頭で立てた寄頭の義を以て答えれば足りる。

A 何故に、初起を問うて、相続を以て答えるのか

初起の信は相未顕著にして、説明に便宜を欠くが故に、相続に約すのである。相続に就くのは、行信の相を広く開示するに便なるが故である。

然るに、A義に就いてまだ一の問題が残る。『初起を問うて、相統を以て答うるならば、唯信独達の宗義を乱すのではないか』という問題である。

今消釈して謂く。唯信独達は、雁門や高祖の化風ではなく、二祖の化風は、信心為本に止まると考えれば、この難は問題にならない（拙論『教格論の研究』（龍谷教学会第四十三号）参照）。故に起行の五念門を以て答えるのは、但だ初起一心の信相（能信所信）を答えるのに、暫く相統を以てするのみである。ここに、齟齬と云う程のものは認められない。

八、起観生信の問答と偈頌と長行

最後に、上來述べてきた起観生信と五念門の關係を承けて、最後に、『論』の偈頌と長行の關係を考察して見よう。

『論』の『願偈大意章』は偈頌の大意であり、『觀見』と「願生」を以て示される。願生の偈は、「故我願生彼阿弥陀仏国」の句を以て望むに、三嚴を所觀とし願生の信心を起す偈として見られる。当然であるが、『願偈大意章』に同じである。

この『願偈大意章』の『觀見』と「願生」を承けて、『起観生信章』の「云何觀」「云何生信心」の問いがあり、その答えが五念門を以て答えられる。即ち『偈』の内容は、願生の信心の内容であり、その信心の内容が、長行に於て『起観生信章』の問答を経由して、以降も五念門の枠組みで論釈されていく次第となっているのである。

〔願偈〕

觀三嚴二十九種

願生彼國

〔願偈大意〕

觀見

願生

〔起觀生信〕

云何觀

云何生信心

故に、從來義でも、偈頌と長行の關係は、起觀生信の問と答の關係と同じであり、信相と具徳の關係とされている。

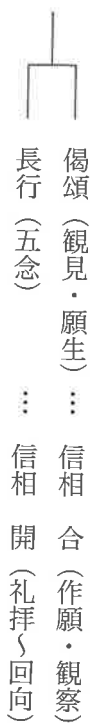
「徴起は信相を以てし、答釈は信徳を以てす、信相は偈頌に已に之を示す、故に長行は其信徳を明す」（是山和上『講義』一三四頁）

結果として、偈頌と長行の間に、先のB義と同じ齟齬がみられることになる。即ち、『信相の偈を説明するのに、具徳と以てする』と云う齟齬である。

今義では、起觀生信の問と答えを、共に信相（能信所信）と考える。故に、偈頌と長行の關係も、同じく共に信相となる。ここに齟齬はない。



・今義（開合義）



この義を以て窺うと、『浄土論』とは、安心偈たる願生偈の内容を、そのまま、五念門と開いて詳解したものと考えられる。即ち偈頌の観見願生と、長行の五念門は、亦開合の關係である。

而して、『論』の『起観生信章』の後の章は、觀察門（觀察体相章・淨入願心章）と、回向門（善巧撰化章／名義撰対章）を更に詳しくしたものと考え得るのである。

結

『願生偈』とは、正にその題目のとおり、論主の願生心たる、信心の内容を偈として開き示したものである。而してその信心は、長行に五念門の枠組みによって、能信・所信・相応の三を以て整理され、他力回向の法として解説されている。起観生信の問答とは、これを開示するものに他ならない。

斯の如く五念門とは、起観生信の信心の問いの答えとして、示された法門なのである。これを以て思うに、五念門とは正に宗意安心を示す法門であると謂つても、謂い過ぎにはならないであらう。（終）

① 花田和上は、起観生信の観を聞の義（観即信）となし、観察門を以て、その観が意業行に延びた相と見なす。

「何故に本經の文相のまゝに聞名生信の字を用ゐずして起観生信の字を用ゐ、故らに聞を観に換えたるやといふに…観の字を用ゐて聞の意義を明かしたるものなり…仏願の生起本末威神功德不思議なるものは、本經上下両卷の説相にして、本論偈頌の、総持して三種莊嚴功德成就とする所なり、而して是を概撰すれば不虛作住持功德の一にして、遇無空過者の句意に包含す、これ名号六字の名義にして衆生所聞の対象なり。」（花田凌雲和上『浄土論述義』七八〜七九頁）

「観察門は如何に見るも行なり…即ち観知（＝信心^③）が意業行に延び行いた観想の相状を以て、第四観察門を施設するものなり。前に考察したる聞名観の意業発動なり」（『同』八二頁）

② 先哲に於て『観察体相章』の扱いに、二途の釈がある。是山和上は、三、四章を大菩薩所修の止観し、一心の具徳とされる。

「第三章より下に明かす所の観察廻向止観二利の行相は、明かに是れ大菩薩の所修にして善男女の不可能事たり。而もそれが生信の釈なれば、善男女が発起する所の一心に具する徳を開いて五念行となせるものと謂はざるべからず」（是山惠覺和上『往生論註講義』一三四頁）

他方で、道振和上は、本論文と同じく、観察体相と浄入願心を、此土行者の所観所信と見ておられる。

- 「安樂の弥陀は是れ本の果なり、此果は願心より成ずれば、弥陀の因果は復た此中にあり、三四の両章は蓋し之を開くなり、観・見・願・生は即ち聞・信なり」(真宗叢書五『往生論註・本決・下卷』七二頁)
- 「三・四は別して観・見を開き、安樂の弥陀は其中に摂在す、是れ所・観・なるが故なり」(『同』七三頁)
- ③ 花田和上は、『論』の「観」を、無有疑心の義を廣大勝解の意をもつて開顯したものといされる。

「観」の字を用ゐて聞の意義を明かしたるものなり：所聞に對して無有疑心なるを聞の意義とす。無有疑心は、即ち經の所謂廣大勝解なれば、是を本論に於て観知の字義を以て開顯せられたるものなり」(『浄土論述義』七八〜七九頁)

- ④ 彼土もまた所観を主となすと考えられる。菩薩の行業という面では能観の智徳であろうが、彼土の菩薩が無功用を得るのは、全く所観の本願力によると考えられるからである。

- ⑤ 『他力廻向の研究』(山口真宗教学第二十二号)を参照。

- ⑥ 大派の先哲に『浄入願心章』までを答釈となす義が存す。

香月院深勵氏の『浄土論註講義』に「この章の初に「云何観云何生信心」の問がありて、「若善男子善女人」等と云ふから答の文ではあれども、この一章では答へ了らぬなり、下の章へ至りて正しく答ふるなり。：観・察・体・相の章と浄・入・願・心の章とで答へ了るなり。」(三九八頁)とある。稲葉円成氏の『往生論註講要』の釈もこれと同意趣の義である。(二四〇、一四九、一六四、一七二頁)

私に評して謂く。答釈をそこまで広く解するならば、むしろ長行全体を以て答釈と考えるべきであらう。何となれば、起観生信答釈の「得生安樂国土」と「見彼阿弥陀仏」は、彼土の事であり、これ含めてを『論註』に「五念力」と釈すのは、蓋し後の五果門に望んでの釈である。また、『願

偈大意章』を承けての、『起観生信章』の答えとは、『願生偈』の内容に他ならない。『願生偈』の内容を、長行全体で論釈するのが『論』の構造であることを合わせ考えると、長行全体を以て起観生信の答えと見るのが自然であろう。

本論文では、『論註』に五念門の終わりまでを一章と区切るが故に、先ずは『起観生信章』全体を以て正答となす。而して、その五念門の内容を更に詳しくする為に、後の『觀察体相章』以下があるとは見る義である。

⑦ 従来義の如く、五念門の後三門（止観回向）を高度なる行と解釈し、觀察門を法藏所修の徳を主となすとした場合、凡夫相應の行は前三門の三業行となる。この時、前三門と後三門で作願門のみが重複することになるが、其の理由が釈然としない。また作願門だけに、願生心と奢摩他の二種の内容を含むのも疑問として残る。

一方今義では、此土凡夫の行は前四門であり、彼此二行に於て作願・觀察二門が重複することになる。この場合は、五念門の中心は、作願・觀察であるから、これに対応させて、彼土菩薩の行業を釈されたと考えることができる。觀察門では、共に本願力を観ずると言う点で、彼此の二行が一致する故に、却つて作願門の彼此の相違が際立つだけなのである。

⑧ 是山和上は、觀察門の行者が所観功徳を得る文を、不虛作功徳の意を以て釈し、不虛作功徳の「遇」を聞名の義となし、

「問、所観の功徳が如実なる故、能観の行者亦如実功徳を得るといふこと、論文何れの処に之を見るぞや。答、三種莊嚴を具体的に示して、真実功徳相と言ふ、彼真実功徳を今は如実功徳といふ、

仏徳を示して観・仏・本・願・力と言ふ、仏の本願力は之に遇ふ衆生に功徳を満足せしむといふ。」「『往生論註講義』一五四頁）「本願力の不虛作住持功徳、豈に第十八願力に非ずして何ぞや、今の釈に遇を此土聞名となす」（『同』一〇一頁）

而して、第三章以下の觀察回向止観二利の行相は大菩薩の所修となし、この功徳を所観の功徳とされる。

「第三章より下に明かす所の觀察回向止観二利の行相は、明らかに是れ大菩薩の所修にして：善男女が発起する所の一心に具する徳：則ち遇の処に速かに満足する功徳宝海の徳相で、是れ本願力の所成なり。」（『同』一三四頁）

⑨ 更に窺えば、これは還相菩薩たる天親菩薩が教導して、衆生に『彼の国に生ぜん意を為さしめる』のである（拙論『論註の善巧摂化章以下の菩薩について』（龍谷教学第四十六号）を参照）。

